私は外科医のタブーを二度犯した

室蘭市医師会
市立室蘭総合病院
佐々木　賢一（ささき　けんいち）

「家族の手術はするな」

外科医になった頃、先輩医師から繰り返し教えられた言葉である。冷静な判断ができなくなる。合併症が起きた時に耐えられない。そして執刀医である前に、「家族」になってしまうからだ。

当時の私は、その言葉を半ば当然のように聞いていた。確かに理屈としては正しい。外科医には客観性が必要であり、感情は時に判断を鈍らせる。実際、自分が執刀しなくても、信頼できる同僚に任せるという選択肢はいくらでもある。

それでも私は、二十年ほど前、母の胃癌手術でメスを握った。

昭和十七年生まれの母は、戦中戦後を生きた世代らしく、弱音を吐かない人だった。胃癌と診断された時も、取り乱すことなく、静かに受け止めていたように思う。

手術室に母を迎え入れ、顔を見た瞬間、私はいつもと違う感覚に包まれた。普段の手術にはない緊張があった。患者ではなく、「母」がそこに横たわっている。当たり前のことなのに、それまで経験したことのない感覚だった。

しかし、麻酔が導入され、覆布が掛けられ、術野だけになると、不思議といつもの自分を取り戻していた。

目の前にあるのは、いつも通りの胃癌手術だ。

むしろ、そうならなければ手術はできなかったのだと思う。

幸い、手術は無事に終わり、母は元気に退院した。今でも存命である。同じ話を繰り返すことも増えたが、それも年齢を重ねた証なのだろう。

母の手術から十年ほど経った頃、今度は父が胃癌になった。医療とは縁遠い家庭で育った私が、結果として二度、親の胃を切ることになるとは、若い頃には想像もしなかった。

父は小学校教員だった。定年時は小学校長を務めていたが、私が通っていたのは全校生徒五十人にも満たない僻地の小学校で、卒業時の担任は父だった。

学校でも家でも「先生」であった父に、私はどこか距離を感じながら育った気がする。

その父が患者として手術台に横たわっている光景は、不思議な感覚だった。

あの頃は父が「先生」だったが、今度は私が「先生」だ。

父もまた寡黙で我慢強い人だった。若い頃は多くを語らなかったが、年齢を重ねるにつれ、少しずつ穏やかになっていったように思う。

父の手術は一月だった。その年の初詣で、私は神社の絵馬に「父の手術が無事に終わりますように」と書いた。今思えば、自分でも気づかないほど緊張していたのだろう。普段、他人の手術のために絵馬を書くことなどない。そんな行動を取ったこと自体が、父の手術が私にとって特別だったことを物語っている。

母の時から年月が経ち、私自身も外科医としてそれなりの経験を積んでいた。以前なら恐怖だったことも、知識と経験で整理できるようになっているはずだった。しかし実際には逆だった。経験を積んだからこそ、術後合併症の怖さや、予後の不確実さを、より具体的に理解してしまうのである。

それでも私は、父の手術でも、執刀医としてメスを握った。

術中、「家族の手術はするな」という言葉が何度も頭をよぎった。それでも、他の誰かに任せるという選択は、最後まで考えられなかった。

父も手術後は元気に退院した。しかし、一昨年、父は癌とは別の病で亡くなった。晩年の一年は要介護となり、私は主治医として、その入院診療にも関わった。

若い頃、私は「手術が成功すること」が外科医の役目だと思っていた。癌を切除し、無事に退院してもらうこと。それが自分の仕事だと信じていた。

しかし父の晩年を通して、私は、手術が終わった後にも長い時間が続いていくことを、改めて教えられた気がする。

外科医として父の胃を切り、その後は主治医として支えながら、私は一人の人間の老いに向き合っていたのだと思う。

先日、父の三回忌を迎えた。

外科医として経験した数多くの胃癌手術の中で、最も忘れられない二例は、結局、両親の手術だった。

「家族の手術はするな。」

今でも、その言葉は正しいと思っている。

それでも、もし時間を戻せたとしても、私はやはり、あの日の手術室に立っていたのだろうと思う。